

ヒトエグサ養殖試験

1. 趣 旨

ヒトエグサは琉球沿岸の岩礁や砂礫地帯に自然に生育しているが、あまり活用されてなかつた。しかし近年日本本土へ輸出されるようになって、需要が高まりつゝあるので優良品の生産と漁家の副業としての普及を目的に継続実施した。

2. 経 過

1955年度、11月始めて佐敷村馬天港内で実施したのであるが、解体船による廃油の為結果不良^(とら)の為中止し1957年度から具志頭村港川に試験場所を変更今年迄継続実施してきたが、1957年度においては

(イ) 種苗着生状況に就いて外海部と入江奥部との比較

(ロ) 水平網 材料に就いて棕櫚繩と藁繩との比較研究

1958年度には、網 材料としては藁繩、棕櫚繩の外に竹（山原竹二つ割り）を加えて比較研究

1959年度は水平 網の敷設水位について試験研究する事にした。

3. 場 所

具志頭村港川の同じ場所である昨年度迄は干潮時の干出部を利用したが今回は湛水部を使用した。

4. 方 法

流れに平行に杭木（末口径6cm長さ約1.5m）を建て込み、これに満潮線及干出時間4時間、3時間、2時間の各部線を定め径4cm長さ30cmの丸太を二つ割りにしたものを上記各線に水平に固定し各水位別にヒトエグサの着生状況を調査する事にした。（図面参照）

5. 期 間

(イ) 施設の時期 1958年11月14日（旧暦10月4日）

(ロ) 取揚げ調査 1959年 2月27日

(ハ) 所要期間 105日間

6. 結 果

(イ) 満 潮 線

僅かにアラミドロが附着するのみでヒトエグサの着生は認められず附着用杭の湿気も少い。

(ロ) 干出4時間線

全面ヒトエグサを以つて覆はれ他の藻類は認められずヒトエグサは平均2.5匴位の伸長を示し、大は平均4匴、小は肉眼で認められる程度のものあり。

(イ) 干出3時間線

ヒトエグサの着生は認められず伸長約4匴平均のアササが全面に着生していた。

(ニ) 干出2時間線

3時線と同様にアササが着生し他の藻類は見受けられず伸長は約8匴平均である。

結 論

前後3ヶ年間継続試験を行つたが、施設及管理の不十分なところがあつて適確な資料を得たとは言えないが結果から分明した事は次の通りである。

1. 養殖施設場所に就いて

- (イ) 波浪の強いところは施設の波損流失の虞があるので静穏な場所を選ぶ事。
- (ロ) 種付状況に就いて鹹度の比較的高い所が良いと云われているが、港川の場合合入江奥部が良い結果を得られた。
- (ハ) 種苗着生後の伸長状況に就いては比較試験を行つていないが、該地の自然の地物についての着生状況から観察して淡水の影響を比較的多く受ける所、(比重1.018~1.024)が良い事。

2. 材料に就いて

干出時においてもいくらか湿気を保持出来るものが良い。

即ち使用材料、藻繩、棕梠繩、山原竹等の中多く適採出来るものは藻繩で棕梠繩、山原竹の順位となる。

山原竹は二つ割にして使用したが種苗の着生は良好であるが伸長率が少い。たゞし藻繩は終期頃には弱くなつて耐用期は1時期が限度であることが分つたが他の二種は2時期以上も使用可能である。

3. 水平の水位に就いて

最適水位は干出時間4時間が最も良くそれより低くても高くても成績は悪い。

4. 設置時期に就いて

試験回数が少く資料が乏しい為断定し難いが胞子の皮膜を破り浮上するのは水温によつて決まる様で即ち $20^{\circ}\text{C} \sim 23^{\circ}\text{C}$ の間だと云われているので9月初旬頃から水温を測定して施設時期を定める事が適當と思う。

